

第38回予防医学実務研修会 子宮頸がんをめぐる最近の動向

県や自治体のがん検診担当者などを対象とした「第38回予防医学実務研修会」（公益財団法人 神奈川県予防医学協会主催、神奈川県都市衛生行政協議会と神奈川県町村保健衛生連絡協議会共催）が、8月22日、神奈川県中小企業センタービル（横浜市中区）で開かれた。昨今、若い女性に増えている子宮頸がんをテーマに、厚生労働科学研究「横浜・神奈川子宮頸がん予防プロジェクト」の研究代表を務めた横浜市立大学医学部がん総合医学教授・宮城悦子先生を講師に迎え、検診やワクチン接種など、これからの動きと課題を考えた。座長は当協会顧問・鈴木忠義。

若年で増加

子宮頸がんは医学の進歩により理論的には征圧可能ながんとして、日本ではここ10年で変化が激しく、1980年代には60代から70歳代の病気が多かったのが、若年に移り、現在は発症のピークは30代から40歳代で、罹患数も年々増え、上皮内がんを含むと約2万人に達している。子育てや社会、地域で活躍する多くの女性が命を失い、日本全体の社会的な損失も小さくはない。

HPVが原因

子宮頸がんの原因の99%がHPV（ヒトパピローマウイルス）の

感染であることは既に知られている。HPVは性的な接触で感染するが、それは極めてありふれたことで、現代を生きている80%以上の女性が生涯のうち一度は感染するとされているが、その90%はHPVが排除される。しかし、宮城県のがん検診受診率とラフ（図1）からもわかるように、検診受診率が上がると子宮頸がんによる死亡率は下がっていく。しかし、先進各国に比べてわが国の子宮頸がん検診受診率は非常に低く、2009年は24.5%。国が掲げる50%の受診率を目標に全国各市町村で2009年から始まった、子宮頸がんの検診無料

低い受診率

子宮頸がんを征圧するには、子宮頸がん検診とHPVワクチン接種の2つの柱がある。子宮頸がん検診は細胞診でがんを疑う異常細胞の有無を判定する。宮城県のがん検診受診率とラフ（図1）からもわかるように、検診受診率が上がると子宮頸がんによる死亡率は下がっていく。しかし、先進各国に比べてわが国の子宮頸がん検診受診率は非常に低く、2009年は24.5%。国が掲げる50%の受診率を目標に全国各市町村で2009年から始まった、子宮頸がんの検診無料



横浜市立大学医学部がん総合医学教授
同附属病院化学療法センター長 宮城悦子先生

横浜市立大学医学部卒業後、同大学附属病院産婦人科医局に入局。医学研究科に在籍し研究を続ける。平成10年、神奈川県立がんセンターの婦人科医長に赴任。13年横浜市立大学医学部の婦人科講師、准教授を経て、現職に。臨床から研究まで広範囲に活躍。多くの学会にも所属する。特に子宮頸がんの治療、予防については、ライフワークとして研究。日本を、世界をリードする子宮頸がん制圧国にすることが夢。

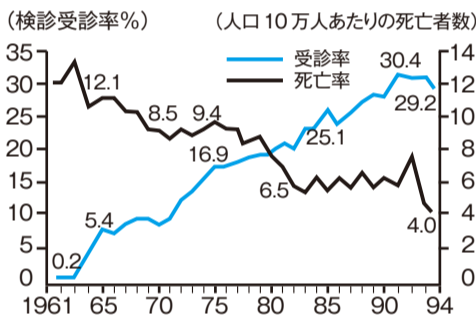


図1 宮城県における検診受診率増加による子宮頸がん死亡率減少効果

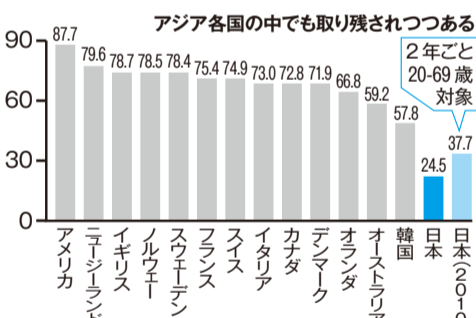


図2 先進各国の子宮頸がん検診受診率
日本の子宮頸がん予防の最大の問題は検診受診率の低さ

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

検診を受けない理由は「時間が無い」「がんが見つかるのが怖い」「症状がないから」などによるものが多い。しかし、早期または前がん期に発見すれば、治療の負担も少ない。しかし、早期または前がん期に発見すれば、治療の負担も少ない。

ワクチンをめぐるワケ
一次予防の方法としてはHPVワクチンの接種が上げられる。子宮頸がんの7割、若年層では9割の原因はHPVの感染によるもの。しかし、早期または前がん期に発見すれば、治療の負担も少ない。

しかし日本以外の世界各国ではこのような頻度での副反応の報告は認められず、ワクチンとの直接的因果関係を疑う根拠がないとの声明を2013年6月にWHO（世界保健機構）は発表している。筋肉注射の疼痛後の心身の反応によるものと考えられているが、厚労省は「治療を最善に導くために各症例につ

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

治療後のQOLも高い。HPVウイルスは性交渉によって感染することから、本年度からのクーポン対象が20歳という年齢の設定に検討の余地がある。細胞診に加え、がんの原因となるハイリスクのウイルス感染の有無を判定するHPV検査と細胞診を併用すれば、さらに前がん病変の検出率が上がり、中等度異形成以上の病変の発見率は99%という。海外ではアメリカとオランダが積極的に検診へのHPV検査導入に取り組み、日本でも国レベルの研究が始まった。市町村単位で研究に参加するもので、近隣では東京都八王子市が参加。2年ごとに3回併用検診を行う、追跡調査をして、HPV検査をどのよう

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

「母親が子宮頸がんになった」「海外から情報を得た」など、現在でも接種を希望する女性がいるため、希望者には細かい情報を記載したパンフレットを作って、不安のないように説明した上で、横浜市大病院ではHPVワクチンの接種を継続

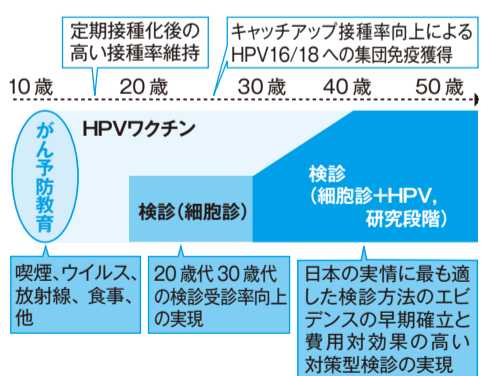


図3 世界をリードする子宮頸がん制圧国へのロードマップ

ワクチン接種、妊娠相談、更年期へと続く女性の健康のトータルサポートも包括